The Supplement for "Kanjo-Bugyo Ogiwara-Shigehide's Lifetime”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47018

『勘定奉行 荻原重秀の生涯』補遺

～読者にお届けしたい追加情報

村井　淳志

はじめに

2007年３月に出版した拙著『勘定奉行 荻原重秀の生涯』（集英社新書、以下『生涯』と略）は初版12,000冊、2012年７月に増刷してもう1,500冊、さらに2016年12月の３刷がやはり1,500冊、累計発行15,000部が発行された。編集部によれば、新書は本来、３万冊は出ないと採算が取れないそうだ。その意味では、集英社には大変申し訳ないことだが、それでも、私が書いた本の中で一番売れている。本のカバーに付した内容要約は以下のとおりである。

膨大な著述を残した新井白石によって、一方的に歴史の悪役に貶められた勘定奉行・荻原重秀。五代将軍綱吉時代後半の幕府財政をほぼ掌中にし辣腕をふるった。マイナスイメージで伝えられる元禄の貨幣改鋳だが、物価上昇は年率三％弱にすぎず、それも冷害の影響が大きい。金銀改鋳以外にも、各種検地、代官査察、佐渡鉱山開発、長崎会所設置、地方直し、東大寺大仏殿建立、火山災害賦課金など、実に多彩な業績を残している。

本書は、金属貨幣の限界にいち早く気づいた荻原重秀の先駆的な貨幣観に着目しつつ、悪化の一途をたどる幕府財政の建て直しに苦闘し、最後は謎の死を遂げるまでの生涯を描く。

前作『脚本家・橋本忍の世界』を刊行した直後の2005年初秋のある晩、「そうだ、次は荻原重秀の評伝を書こう！」と決心した。近世史の文献についてまったくと言っていいほど予備知識のない状態からスタートして、11ヶ月後には400字詰め原稿用紙換算で300枚を脱稿するという、今、思い起こしても神懸かり的というか、自分でも信じられないようなライターズ・ハイの状態で執筆した。「あとがき」にも書いておいたが、もともとは歴史小説を書こうとしたのだが、途中で「自分には小説は無理」と諦め、ノンフィクションに変更した。

そんなふうに疾風怒濤の如く駆け抜けたから、脱稿後、「多分いろいろミスや見落としがあるだろう、もう少し寝かせてから出版した方がよいのでは」と迷った。しかし新書という体裁上、枚数はそう増やせないし、小さなミスの訂正を続けてもある意味キリがないので、一旦世に出して、再版の機会に補正していけばよいと割り切ることにした。

ところが2012年の再版時、編集部に補強を申し出ると、「初版と再版で、読者に提供される情報量が著しく異なると不公平になるので、修正は字句訂正など最小限にとどめて、それ以外は別の機会でお願いします」と言われてしまった。別の機会と言われても、そんなチャンスが他にあるのかなと思っていた。

しかし近年、大学紀要が電子化され、簡単に読めるようになった。昔は、大学紀要なんて誰も読まない、と相場が決まっていたものだ。しかし今なら、国立国会図書館のＯＰＡＣでタイトル検索に「荻原重秀」と入れればこの小文もヒットするだろうし、本を読んで下さった方なら必ず興味を持ってくれるはずだ。タイトルをそのまま検索すれば、ＫＵＲＡ（金沢大学学術情報リポジトリ）にリンクが飛び、簡単にダウンロードできる。だったらこの際、補遺を紀要に掲載しておけば、読者へのアフターサービスになるだろう。そう考えて、この小文をまとめた次第である。

平成28年10月３日受理

1、反響と引用例

最初に『生涯』の反響や引用例について書いておきたい。

実は本書の刊行当初、毎週のように全国紙の書評欄をチェックしていた。特に気にしていたのは、朝日新聞の書評委員（当時）の野口武彦氏だ。私が、荻原重秀の死の真相を調べた時、『兼山秘策』の写本の確認を思い立ったのは、野口氏の『忠臣蔵』（ちくま新書）がきっかけだったからだ。浅野内匠頭が吉良上野介に斬りかかった時、その場で浅野を取り押さえた梶川与惣兵衛の日記には二種の写本があり、浅野は訳のわからないことを叫びながら吉良を襲ったという写本と、「此間の遺恨、覚えたるか」と言ったという写本があるという。しかし後者は事件から20年以上後に書き写された写本だから信用できず、前者に拠るべきで、事件の背景に何か深いいきさつがあったというより、浅野の乱心とみるべきだと野口氏は推定している。写本まで遡ると、そんなことが分かるのかと感心したことが、『兼山秘策』の写本の書誌調査を徹底的にやることにつながった。その結果、大きな発見があったのだから、野口武彦氏には非常に感謝し、また尊敬もしていた。だからぜひ、野口氏には書評で取り上げてほしいと思い、『生涯』刊行（３月）後は日曜日ごとに、朝日新聞の書評欄をワクワクしながら開いたが、取り上げられておらずがっかり、の繰り返しだった。梅雨時になるとさすがに諦めて、「野口武彦氏に無視された」という苦い思いだけが残った。唯一、「信濃毎日新聞」でケインズ経済学者の根井雅弘氏（京都大学）が書評で取り上げてくれたが(2007年６月３日付)、「多少過大評価の感はあるが」などと書かれ、さほど好意的でもなかった。富士通の社内報に書いてくれと言われた（巻末「参考」参照）のが、数少ないよい反響だった。

ところが2007年12月23日付朝日新聞「書評委員、今年の３点」。これは、朝日新聞の全書評委員がその年に取り上げた本の中からそれぞれがベスト３を選ぶという、年末恒例の企画である。すでに書評した作品から選ぶのが通例だから、載っているはずもないのだが、「ひょっとしたら…」という予感というか、淡い期待があった。すると、何とあったのだ。野口武彦氏が次のように、『生涯』を取り上げて下さっていた。

「うっかりいい本を見落としていた。元禄貨幣改鋳の悪役として扱われてきた重秀の《名誉回復》を試みる力作である。断片的な史料を博捜して復原する史料調査が行き届いている。重秀は政敵の新井白石にいじめ殺されたと主張する結末がパセティックだ。」

「うっかり見落としていた」というのは、おそらく、書評欄を担当する記者が野口氏に渡す新刊本のリストから外れていた、ということなのだろう。そういうことだったのかと勝手に納得し、かつ本当にホッとできた。友人からも祝電めいたメールをたくさん受け取った。一時期ストップしていた売り上げも、また少し上向き、出版社への義理もちょっとは果たすことができた。

さらに、全国紙の書評欄で「今年のベスト３」に選ばれたおかげで、国立大学法人評価委員会による第1期中期目標期間（2004～2009年）の業績評価で『生涯』はSS（卓越した研究業績）と評価され、所属する金沢大学教育学部の「研究」が「期待される水準にある」と判定されたことに、一役買うことができた。

その後は、様々な本や論文、雑誌などで引用され、参考文献にあげられた。経済史家の浜野潔氏（関西大学）が『日本経済史1600-2000』(2009年、慶應義塾大学出版会）の中で、好意的に引用して下さったのが早い例だろう。また近世文学がご専門の島内景二氏(電気通信大学)は『柳沢吉保と江戸の夢』(2009年、笠間書院)で「村井氏よる荻原重秀再評価は溜飲が下がる(中略)、膨大な史料を読み解いて重秀の本質に

迫った手腕は見事である」と書いて下さった。

中でも影響が大きかったのは、経済学者・若田部昌澄氏（早稲田大学）の『もうダマされないための経済学講義』（2012年、光文社新書）だ。日本経済新聞にもたびたび登場するリフレ派大物経済学者が、新書という比較的部数の多い出版物の中で、なんと６ページにもわたって、『生涯』を大変詳しく、好意的に紹介して下さったのだ。

私は、本来は教育学者（歴史教育・社会科教育）で、近世史に関してはいわば素人だ。その私が、近世史研究の通説・常識に挑戦した『生涯』に対しては、ネット上で「素人が何を言っている」という類いのコメントも散見された。しかし野口武彦氏に加えて、若田部昌澄氏が好意的に評価して下さったことで、完全に潮目が変わった。マスコミからの出演依頼が来るようになった（末尾の「参考」参照）のも、その頃からである。

2016年８月刊の高木久志『通貨の日本史』（中公新書）では、荻原重秀についての評価はほぼ『生涯』を踏襲していて、ちゃんと参考文献にも挙げられている。日本史研究のメインストリームにも受け入れられつつあることを感じた。

ところで、『生涯』の中で、「これほど有名であるにもかかわらず、荻原重秀を主人公にした本格的な長編歴史小説がいまだに現れない」と書いたのだが、それに刺激されたらしく、高任和夫さんという経済小説を得意とされている作家が、『月華の銀橋～勘定奉行と御用儒者』（2009年、講談社）という小説を刊行された。文庫化の際は改題して、『貨幣の鬼～勘定奉行荻原重秀』（2013年、講談社文庫）となっている。この小説、荻原重秀に関するエピソードはほとんど『生涯』が元になっている。同じような表現も多い。にもかかわらず、献本すら、していただけなかった。無視されるのは悲しいが、真似されるのも困りものだ。

また2014年７月から多くの地方紙で連載が始まった、相場英雄氏の『御用船帰還せず』（2015年に幻冬舎より単行本刊行）も荻原重秀を主人公にした小説で、『生涯』を参考文献の筆頭にあげて下さっている。こちらはエンターテインメントと銘打っているだけあって、重秀が隠密組織を操っていたり北町奉行所と対決したりと、荒唐無稽な展開で、一読して鼻白むだけだった。

他方、時代小説家の諸田玲子さんからは直接、メールをいただいた。諸田さんは以前、『其の一日』（2002年、講談社、現在は講談社文庫）という連作短編小説集の一つで荻原重秀を主人公に取り上げていて、この作品で第24回吉川英治新人賞を受賞されている。『生涯』を読んで下さり、改めて、荻原重秀がらみの長編小説を書きたいので、一度お会いしたい、という趣旨だった。一切連絡のなかった高任氏らの場合とは正反対の、大変気持ちの良いお便りだったので、できるだけの協力は致しますと答えた。旗本の居住地のリサーチや、佐渡の現地調査などに同行させていただいた。その後、諸田さんは『小説新潮』（新潮社の月刊誌）2014年10月～15年10月号で『風聞草墓標』という、非常にスリリングな時代小説を連載・完結された。「風聞草」とは、植物の「荻」の別名だそうだ。主人公は、荻原重秀の失脚に加担した萩原美雅の娘で、荻原重秀の嫡男・源八郎の元・許嫁という設定。実際、上司の荻原重秀（さるかく町）と部下の萩原美雅（すいどう橋）は、地名こそ異なっているが通りを隔てて目と鼻の先に屋敷があり、子ども同士の年齢も近く、許嫁であっても不自然ではない。女性を主人公に時代小説を数多く手掛けておられる諸田さんならではの、秀逸な人物造型である。2016年３月、単行本として刊行された。

２、荻原重秀の居住地が特定できた（代官町、猿楽町）

荻原重秀の生家は、1680年（延宝８）に刊行された『江戸方角安見図』（朝倉治彦編、1975年　東京堂出版）によって特定できたことは、『生涯』に書いておいた。また、江戸切絵図の

上に透き通る用紙に印刷された現在の地図を重ねて、江戸時代の場所が現在のどこに当たるかを簡単に調べることの出来るという、大変便利な地図も出版されている（新創社編『東京時代ＭＡＰ』大江戸編）。調べてみると、現在の中央区東日本橋１丁目３番地。

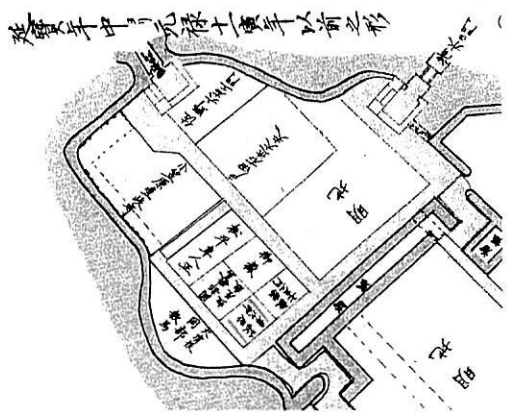
ところが、荻原重秀が何歳までこの家に住み続けたのかは不明だった。次男の荻原重秀は何歳くらいの時に、別に拝領屋敷をもらうのか。召し出されても、結婚しても、父や兄と同居なのだろうか。調べてみたがよくわからない。『江戸方角安見図』が刊行された1680年（延宝８）年は重秀が召し出されて６年後、23歳だから結婚していてもおかしくないが、同書の索引には荻原彦次郎（重秀の通称）の名前は出てこない。ということはまだこの家で父親や兄一家と同居していたらしいのだ。

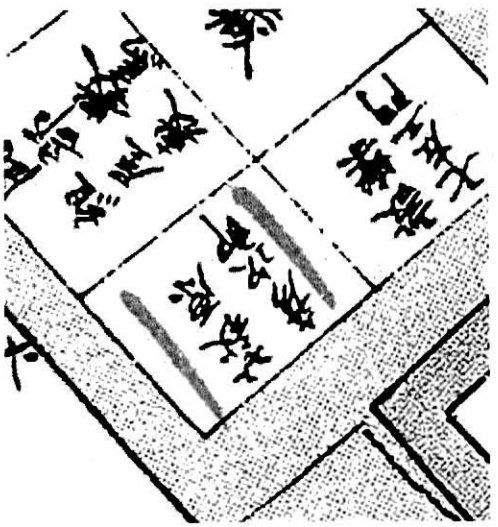
史料で荻原重秀の拝領屋敷を確認できるのは、勘定吟味役に抜擢された1687年（貞享４）。この年の武鑑（『太平武鑑大全』）で、初めて荻原彦次郎の名前に地名が入り、「代官丁（町）」と記されている。初めは「代官町」という土地がどこにあるか、まったくわからなかった。

首都高速道路を運転する人なら、「代官町ランプ」の存在を知っていて、代官町は竹橋付近とすぐにわかるだろう。私は首都高速を運転したことがないので、代官町がどこにあるか、皆目見当がつかなかった。ある日、地下鉄東西線の竹橋駅を降りて、国立公文書館に向かう道を歩きながら「代官町、代官町」と考えていたら、目の前の高速道路の出入り口表示にまさにその「代官町」が見えて仰天した。すぐに調べて、現 在の「千代田区北の丸公園」という住居表示がかつての「代官町」であることを、ようやく突き止めたのだ。

現在の北の丸公園は、江戸時代はまさに北の丸、つまり城郭の一部だったから、切絵図には掲載が禁止されていた。切絵図をいくら調べてもわからなかったのも道理だ。

これを特定するためには幕府側の史料を見るしかない。それが幕府の作事奉行が残した『江戸城下変遷絵図集』（1985年～、原書房）である。やはり朝倉治彦氏が編集し、索引が付けられている。この貴重な資料の存在を、『生涯』執筆時、恥ずかしながら知らなかった。言い訳をすると、国会図書館の人文資料室の参考図書（開架）に置いてないので、切絵図よりも詳しい地図の存在に気づかなかったのだ。後で人文資料室の係官になぜ置いていないのか尋ねたところ、この資料は索引があるので索引の巻さえ置いておけば書庫から取り寄せられるが、切絵図は索引がないので現物がなければ何が載っているかもわからない、だから切絵図を優先して開架に置いてあるのだ、とのこと。このあたりが素人研究





者の悲しさである。専門家なら先生や先輩に、それを調べるんなら、これこれの資料があるよ、と教えてもらえただろう。仕方がない。でも今は、金沢大学の附属図書館に入れてもらったので、いつでも見ることができるようになった。

『江戸城下変遷絵図集』第２巻87頁にあった。「竹橋御門清水御門田安御門内・半蔵御門内」の「延宝年中ヨリ元禄十一寅年以前之形」に「萩原彦次郎(ママ)」が見える。現在の住所で言うと千代田区北の丸公園１丁目１番地だが、北の丸公園の大部分がこの番地だから住所だけでは特定しにくい。『東京時代ＭＡＰ』で調べると、国立近代美術館工芸館（旧・近衛師団本部）のすぐ裏のあたりだ。生まれ育った家よりもずっと江戸城に近く、広く、750石の中級旗本として厚遇されたことが分かる。荻原重秀はこの屋敷に丸10年住んだ。

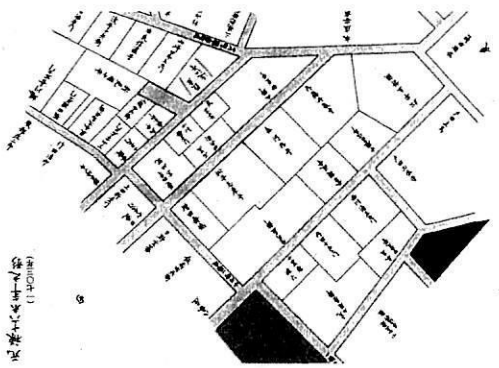
その次、1696年(元禄９）に勘定奉行に昇進し、2000石を拝領する高級旗本となると、もっと良い屋敷が与えられた。武鑑（『本朝武林系録図鑑』）では「さるかく丁」とあるが、やはり切絵図では見つからなかったので、『生涯』では、「集英社のビルの一つが立地する、東京都千代田区猿楽町である」と記しておいた。

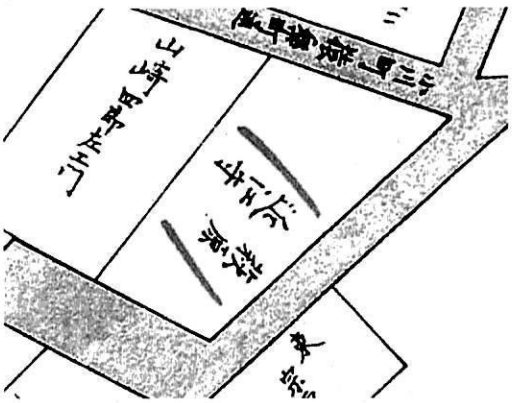
ところがこれも、『江戸城下変遷絵図集』第３巻65頁、「小川町之内」の「元禄十六未年之形」に「萩原近江守(ママ)」が記載されていた。『東京時代ＭＡＰ』で調べてみると、現在の地名は猿楽町ではなく、千代田区神保町１丁目６番地であることが分かった。神保町に「書泉グランデ」という大きな書店がある。この「書泉グランデ」前、靖国通りを挟んだ向かい側一帯に荻原重秀の屋 敷があった。現在、お茶の水小学校方面に向かう道(上図で「小川町猿楽町辺」と記されている道路)との交差点角にマクドナルドがあり、その左にスターバックスコーヒー、さらに左へ数店舗離れて、以前に石井スポーツという店舗があったあたりまでである。長さ100メートル、奥行き30メートル。つまり1000坪程度の広大な屋敷がここにあったのだ。荻原重秀は亡くなる1713年(正徳３)までここに住んでいた。

集英社新書の編集部がある専修大学前交差点のビル（神保町３丁目13番地）からは、400メートルくらい。また私が役員をしている団体（全国大学高専教職員組合）の事務所がかつて神保町にあり、界隈をしょっちゅう散策していた。荻原重秀の屋敷前の道を、知らずに何度も歩いていたのだ。それも感慨深かった。

３、堀田正俊に仕えていた時期の新井白石の勤務屋敷

1683年、新井白石は大老・堀田正敏に儒者として仕え始めた。堀田は1680年の老中就任直後、五代将軍綱吉から初めて、勝手方老中、すなわち月番に関係なく経済財政をつかさどる老中を命じられている。だとすれば堀田は、勘定所幹





部はもちろん、延宝検地や沼田城収公で功績をあげ、1683年に勘定組頭に昇格したばかりの荻原重秀とも接触していただろう。『生涯』ではこの時期に、荻原重秀と新井白石の接触がなかったかどうか、という問題を提起した。もし白石が勤務していたのが、堀田の上屋敷ならば、かつて酒井忠清が住んでいた大手門前の屋敷である。他方、荻原重秀が関東方組頭として勤務していた下勘定所は、大手門をくぐってすぐ右手にあった。両者とも堀田正俊という共通の「上司」に仕え、年齢も一歳違いと近い。堀田が暗殺されるまでの２年半もの期間、大手門を挟んで目と鼻の先で勤務していて、まったく接触がなかったとは考えにくい。ただ新井白石のような儒者がどこで勤務していたのか、上屋敷なのか他の屋敷なのかわからなかったので、『生涯』では保留のままにしておいた。

ところが読者の方から、新井白石の晩年の書簡に、上屋敷に住んでいたことを示す記述があるとご教示いただいた。調べてみると、『新井白石全集』第５巻（1906年、国書刊行会）514頁にその記述があった。

「老拙（註;白石自身のこと）むかし堀田筑州（正俊）の家へつかへ候時に（中略）、これは雅楽殿（酒井忠清）やしき筑州へ下され候によりての事に候」

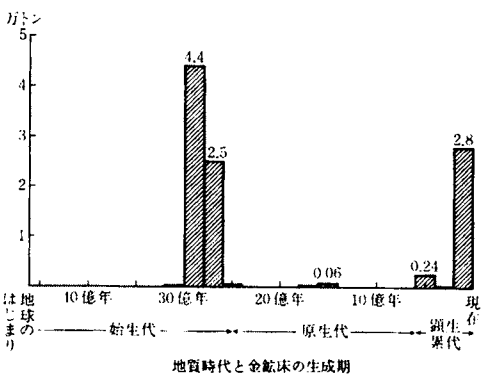
やはり新井白石は大手門前の屋敷に居住していたのだ。両者は接触していた可能性が高いと思われる。この直後から二人の運命は大きく分かれていく。新井白石は、主人の堀田が殺されてまもなく二度目の浪人生活を強いられる。他方、荻原重秀は、勘定吟味役・勘定奉行と順調に出世していく。新井白石にとっては思い出したくもないニアミスだったろう。

４、なぜ日本は黄金の国だったのか、なぜそれは短期間だったのか

日本が中世に黄金の国だったことは、江戸幕府による独自貨幣制度の確立につながった。そして近世中期以後、そうではなくなったことは、荻原重秀が貨幣改鋳を実施した最大の理由である。この間の流れを理解するためには実は、金鉱脈のでき方についての地質学的な知識が必要となる。『生涯』を書いた時点ではやや曖昧なままだった。その後、同僚の地質学者に紹介してもらった、井澤英二氏『よみがえる黄金のジパング』（1993年、岩波書店）を読んで、非常によく理解できた。簡単に紹介しておこう。

下のグラフを見ていただきたい。地球の歴史において、金鉱床の形成に二回の大きな山があったことがわかる。最初の山は始生代末期、今から三〇億年前のことだ。地球の歴史は四六億年だから、地球誕生の十六億年後ということになる。二つ目の山は新生代で、今から二億年前以内の比較的新しい鉱脈である。この二つは生成のメカニズムを異にしていて、鉱床学者は前者を大陸型、後者を島弧型と呼んで区別している。

基本は大陸型の方だ。金の産出量自体も、前者の方がずっと多い。しかし大陸型の鉱床ができるのは、マントルと地殻の接触面（モホ面）に近い、地表から三〇キロもある深い部分である。それが三〇億年間の地殻変動によって、たまたま地表まで隆起してきたとき、人間によって発見される。



井澤英二『よみがえる黄金のジパング』より

これに対して島弧型は、地中深くの金を、火山活動が地表近くまで運んでくれた金鉱床なのだ。マグマに接触した地下水は熱せられるが、地中は岩盤の重みによって高圧状態にあるため、百度を超えても蒸発しない。これを熱水と呼び、モホ面付近では六百度もの高温液体状態にある。熱水は金（硫化水素と結合している）を溶かし込み、比重が軽いので上昇する。そして地表近くにまで昇ってくると、岩盤の圧力が低下するので、熱水は蒸発を始める。溶けていた金は硫化水素と離れて沈殿する。こうしてできたのが、島弧型金鉱床だ。だから島弧型金鉱床は地表からごく浅いところに形成される。比較的単純な道具でも採掘が可能なのだ。しかし熱水が運んでくれた分だけだから、絶対量は少なく、枯渇も早い。

注目すべきなのは、二つの鉱床の地域分布である。大陸型の金鉱床は、地球上の大陸すべてに分布している。大陸なら必ずあると言ってよい。ところが島弧型の金鉱はほぼ、環太平洋火山帯地域に集中しているのだ。これは島弧型の金鉱が、火山ならどこでもできるというわけではなく、最古のプレートである太平洋プレートと周囲の大陸プレートとの接触面でのみ、生成したことを暗示している。

ところで、金採掘の歴史を道具によって区別してみると、第一に「篩い」の時代、第二に「鏨」の時代、第三に「ダイナマイトとボーリング機械」の時代に分けられる。篩いは砂金をとるための道具で、大陸型・島弧型、どちらでもありうる。鉱床の露出した部分が風化作用によって川に流れ、沈殿したものだ。地殻の隆起と岩石の風化という、長い時間をかけた自然の力の恩恵を受けて、人間は受動的に金を集めているに過ぎない。

次の鏨の時代になって初めて、人間は金鉱に対して能動的に働きかけるようになる。対象は島弧型金鉱である。鏨を使って人間の手で掘り進めるのだから、鉱脈がごく浅いことが絶対条件だ。大陸型の場合、鉱脈が浅いケースは例外である。ところが島弧型は、熱水の上昇のおかげで、すべての鉱脈が浅い。

第三のダイナマイトとボーリングの時代になってようやく、大陸型の深い鉱脈の開発が可能となる。人類は、ようやく金鉱を制圧しつつある。現在はまさにこの時代で、金産出の多い国々の金鉱はみな大陸型である。

ここまで書けば先の疑問、すなわち、なぜ中世の日本は黄金の国だったのか、そしてなぜその時代は短時間で終わってしまったのかという疑問は氷解したのではないか。つまり日本が「黄金の国」たり得たのは、鏨の時代だったのだ。環太平洋地域はいずれも大航海時代、ヨーロッパからもっとも遠い地域だった。そして環太平洋地域でもっとも人口が多く、もっとも教育水準が高く、もっとも金に対する需要が旺盛だったのが、日本である。地球上の他の地域がまだ篩いの時代、もしくはたまたま露出した大陸型鉱床を掘っている時代に、日本では地球上でも例外的に豊富な島弧型金鉱を、鏨を使って掘りまくっていたわけだ。その豊富な金をつくって金貨による貨幣制度を確立したものの、大量に金が採掘できる時期は短い。荻原重秀が貨幣改鋳に踏み切らざるを得なかったのは、こうした背景があったのだ。

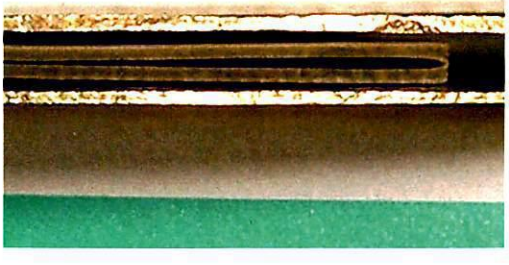
5、慶長小判と元禄小判の厚さについて

『生涯』に書いたとおり、慶長小判も元禄小判も、金と銀との合金である。慶長小判には金が84％、元禄小判には57％含まれている。しかし二つの小判は重さがまったく同じ18ｇ、大きさも同じ縦7.4センチ、横3.9センチだから、時代考証がいい加減な時代小説にはしばしば、幕府が秘密裏に金の含有量を変えた、という設定が登場する（たとえば上田秀人『破斬～勘定吟味役異聞』2005年、光文社文庫）。もちろん、幕府は公式の法令（『御触書寛保集成』第1757号）で「位（品位）を変えて（貨幣発行）量を増やす」と明言しているから、秘密裏になどということはありえない。荒唐無稽な話である。

しかしでは、小判を溶解してみないと、どれくらい金の含有量を変えたのかはわからないものだろうか。それも違う。というのは、小判はあくまで、金と銀の合金である。化合物ではない。したがって比率が変われば、体積が変わる。金と銀の比重はほぼ2対1（正確には、19.32：10.51）だから、重さが同じなら、軽い銀を多く含む元禄小判は、慶長小判よりも体積が大きいはずだ。先に述べたように縦横の寸法は同じだから、厚みが違うはずである。金銀の比重、含有比率という既知数から連立方程式を解けば、未知数の両者の体積差が簡単に算出できる。計算してみるとおおむね、元禄小判の方が20%、体積が大きい（厚ぼったい）ことが分かった。だから当時の人々は、元禄小判を触った瞬間、「あ、分厚い」とすぐにわかっただろう。当然、束ねて水に漬けるなどして体積を測定する。その結果、金銀の比重、20%体積が増えたという既知数から逆に、未知数の含有率の変化を簡単に算出できる。つまり、融解しなくても、金の含有率がどれくらい変化したか、計算するだけですぐわかったはずなのだ。

ここまでは『生涯』に書いたことだ。しかし本当に、元禄小判が慶長小判より分厚かったのか、確かめたわけではなかった。確かめようがない。高価な現物は、入手はおろか、触る機会さえない。日本銀行附属貨幣博物館（中央区日本橋本石町）でガラス越しに見るだけならできるが、展示スペースに埋め込んであるため、厚さを確認することができない。仕方ないと諦めていたが、『生涯』出版後、古銭商の方に協力を依頼することを思いついた。

インターネットで調べて、横浜に本社のある「有限会社アイコインズ」という会社に電話して、二つの小判の厚さを確認したいのだがとお願いしたら、社長の石塚眞一郎さんが親切にも、二つの小判を重ねて横から撮影した写真を送って下さった。それがこの写真だ。上が元禄小判、下が慶長小判である。一見して、元禄小判の方が少し分厚いことが分かるだろう。石塚社長も厚みが違うことを初めて知ったそうで、「本当ですね、元禄の方が2割ほど、分厚いですね」と感心しておられた。こうして『生涯』で書いたことをようやく実物で確認することができた。ちなみに古銭市場では、発行数の少ない元禄小判の本物はマーケットに出てくることが少なく、したがって高価で取引され、250万円の値がつくこともざらだそうである。慶長小判の相場は200万円くらいだから、金の含有量が少ない方が高値というちょっと不思議な現象だ。



6、金沢佐太夫の死について

荻原重秀が1691年（元禄4）、佐渡奉行として佐渡に乗り込んだことは、『生涯』に書いた。重秀の佐渡渡海には、平勘定の平岡四郎左衛門と、支配勘定の金沢左太夫という二人の属吏が同道していた。『生涯』では、この金沢左太夫が5月22日、「故有りて」自殺したことを紹介した（典拠は『佐渡年代記』）。一行の佐渡渡海後、わずか一ヶ月半後のことである。理由がわからなかったから、「仕事のことで、彦次郎に叱責されたのかも知れない」と書いておいた。高任和夫氏の小説でも、私の記述に忠実に従い、彦次郎に叱られて自殺したことになっている。

ところが真相はまったく違っていた。諸田玲子さんらと佐渡の現地調査に行った時、たまたま相川の図書館で、『佐渡相川の歴史　資料集10　金銀山水替人足と流人』（1984年、相川町史編纂委員会編）という本を見ていた。本の存

在自体は執筆時も把握していたが、人足や流人のことだから、荻原重秀とは関係ないだろうと判断し、未見のままだったのだ。

504ページに、「佐渡名勝誌」元禄４年の記事が掲載されていた。以下、一部を引用する。

「五月廿三日、金沢左太夫自害ス。是ハ御検地御用トシテ平岡四郎左衛門・御勘定小頭切米三百俵、金沢左太夫殿御目付ト共ニ、荻原氏御同道の処、於窪田平助宅女色ニ付キテ口論し、浅手ヲ蒙リヌ。彼ノ平助ハ流人タルノ処、其家ヘハ目付ノ役人トシテ忍ビテ出会シ、其上手ヲ負ハセ申分不立シテ、左太夫自害シヌ。公辺ヘハ乱気ト申シ立ツル云々。（以下、略）」

つまり金沢左太夫は、窪田平助という流人の家に行って女色に及んだ。幕吏としては規律違反なので、内緒で行ったらしい。ところが窪田と口論となり、おそらく抜刀の末、金沢は浅い傷を負った。流人に怪我を負わされて面目ないのと、流人宅での女遊びがバレたので、自殺したというわけである。窪田平助という男は元旗本で、一度も召し出されることなくずっと小普請組所属。そのあげく、博奕の常習者として遠島申し付けられ、佐渡に流されていた（『寛政譜』）。佐渡ではおそらく、自宅に売春宿を開設していたのだろう。窪田平助も仲間五人と共に、同じ年の八月、幕吏（金沢左太夫）に怪我を負わせた罪で死罪になっている。金沢にしても窪田にしても、何か哀れな末路である。

７、なぜ物価が上がらなかったのか

荻原重秀による元禄貨幣改鋳によって、物価の著しい上昇はなく、10年で30％程度であったこと、改鋳年の1685年（元禄８）と翌年の米価急上昇は冷害が原因で、冷害が収まると米価は再び暴落したことは、『生涯』に書いておいた。そのお話しをすると、「貨幣流通量が50％も増加しているのに、なぜ物価が上がらなかったんですか」という質問を受ける。

50％増（＝150％）という数字は、元禄小判の金の含有率が慶長小判の３分の２なので、その逆数という意味だ。この数字は、慶長小判がすべて元禄小判に改鋳され、かつ長崎貿易による金銀流失がストップしたと仮定した場合に初めて実現する数値である。実際には慶長小判の退蔵がかなり長引き、また貿易による金銀流失も続いていたから、流通貨幣量そのものがそれほど劇的には増えていないことが、まず考えられる。ただ、だとすると、重秀の改鋳策は効果が薄かったことになる。

それよりももう一つの可能性の方が重要である。それは、当時の日本経済の、潜在生産力と実際の稼働生産額の間に、かなりギャップがあったという想定だ。つまり、労働力や原材料、生産設備は十分存在するにもかかわらず、貨幣（資本＝元手）だけがないために、労働・原材料・生産設備が遊休状態に置かれていたのだ。デフレ経済の下ではしばしば起こりうる現象である（デフレ・ギャップ）。この場合は、貨幣流通量が追加投入されれば、遊んでいた労働や資材・生産設備が稼働し、モノやサービスの生産が大幅に増える。モノやサービスの供給が大幅に増えれば、当然、物価に対して下落圧力となる。つまり、貨幣量の増大が、実質GDPの増加に対してきわめて有効だったわけだ。元禄文化が花開いたのは、こうした経緯があった。これが、貨幣の増大にもかかわらず物価が顕著に上がらなかった、最大の要因だと思われる。

もうひとつ、改鋳によって幕府は莫大な出目（シニョレッジ＝通貨発行益）を得たが、同時期に公共投資を行っている。しばしば批判されるように、寺社仏閣の整備もやっているが、他方で交通インフラも整備している。代表的な例が、1694年（元禄７）に開通した新大橋の建設、1696年（元禄９）の両国橋の本格再建、1698年（元禄11）の永代橋の建設、同年の日本橋再建などである（鈴木理生『江戸の橋』、2006年三省堂）。交通インフラの整備は、モノやサービスのコストを引き下げるから、これも物価騰貴に

対して抑制的な要因として作用したはずだ。

実際にはこれらの要因が複合しあった結果だと考えられる。しかしいずれにせよ、当時、精緻な経済統計があったわけではなく、またマクロ経済理論が存在したわけでもない。荻原重秀自身も、どれくらい流通貨幣量を増大させればプラスの経済効果が持続するのか、まさに手探りだったろう。貨幣改鋳も万能であるはずはなく、潜在生産力が現実化している状況で貨幣を増やせば、今度はまさに悪性のインフレを引き起こす。しかしそうしたことは、マクロ経済理論を知っている私たちだから言えることで、初めて貨幣発行量の操作に踏み切った荻原重秀に、そこまでの知見を求めるのは、ないものねだりだ。そういう非歴史的で超越的な批判は、厳に戒めなければならない。

8、『兼山秘策』の書誌調査、その後

『生涯』の第9章「膳下断食」で、荻原重秀の死について記述した『兼山秘策』(『兼山麗澤秘策』というタイトルの写本の方がずっと多いが）には、写本によって記述の違いがあり、滝本誠一編『日本経済大典』の活字版は、あとから書き込んだメモをそのまま本文に組み入れてしまうなど、問題が多いことを指摘した。『国書総目録』では、『兼山秘策』は、次の写本が確認されている。以下、カッコ内の冊数は一部が何分冊かを示す。カッコが複数ある場合や、部数を明示している場合は、複数種の写本を所蔵している、という意味である。

【写本】国立国会図書館（六冊），国立公文書館内閣文庫（八冊本三部），宮内庁書陵部（八冊本二部）（一一冊），東京国立博物館（八冊），大谷大学（一〇冊），岡山大学池田文庫（一八冊），関西学院大学（一二巻一二冊），九州大学（八冊），京都大学（一五巻一〇冊）（八巻八冊）（正徳二 - 享保一六、八巻八冊）（向山誠斎雑記丁未一）（巻四のみ）（附録一冊），京都大学谷村文庫（寛政一二写一六冊），慶応大学幸田文庫（天保一三写二冊），神戸大学（一二冊），早大（自筆、五巻五冊）（一〇冊），東大（八冊）（正徳元 - 享保一〇、一五冊）（三冊），東京大学史料編纂所（一五冊），東北大学狩野文庫（七巻七冊），大阪大学（一五巻一五冊），広島大学（八冊），大阪府立図書館（八冊本二部）（七冊），日比谷図書館（五冊），福井県立図書館松平文庫（九冊），金沢市立玉川図書館氏家文庫（八冊），同加越能文庫（ママ羅月窟文庫の誤り）（巻九・一一・一二欠、一五巻一一冊），同稼堂文庫（一五冊），豊橋市立図書館（四冊），徳川美術館蓬左文庫（抜萃、四巻四冊），栗田文庫（一五巻八冊），伊勢神宮・神宮文庫（五冊），御茶ノ水図書館成簀文庫（一冊），天理大学（五冊）（巻二のみ）（巻七 - 一五、五冊），無窮会図書館神習文庫（五冊），旧浅野文庫（八冊）（九冊），旧彰考文庫（八冊），石川謙（五巻五冊）【複刻】〔活字〕日本経済叢書二・日本経済大典六

この表の内、旧浅野文庫、旧彰考文庫、広島大学は戦災で焼失していることがわかった。また栗田文庫、石川謙とあるのはいずれも個人所有で、所在不明で閲覧できないことも確認した。残りの資料について、少しずつ確認済みを増やしていった。これまでに岡山大学池田文庫、神戸大学、東北大学狩野文庫、大阪大学、無窮会図書館、伊勢神宮文庫、蓬左文庫、豊橋市立図書館である。いずれも、すでにメモ書きされた写本を筆写したもの、すなわち『生涯』P.215～217の表で言えば3に該当する、比較的新しい写本ばかりであった。つまり荻原重秀の死の真相に関して、『生涯』を執筆した時点での推理には、まったく影響しない資料ばかりであった。上記リストで未確認なのは、九州大学所蔵本のみである。

その後、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースが公開され、国書総目録掲載分以外にも多数、『兼山麗澤秘策』写本が存在することが明らかになった。すべての資料確認が終了するまでにはかなり時間がかかると思わ

れるが、今後とも、未確認資料の確認は続けていくつもりである。ただいずれも『兼山麗澤秘策』という外題が示す通り、新しい写本である可能性が高く、荻原重秀の死の真相の究明に影響するようなものはないだろうと思われる。

9、荻原重秀再評価を機に、「一張一弛」史観からの脱却を

『生涯』に書いたように、江戸時代は全体を通じて恐ろしく高金利（15％程度）であった。流通貨幣の絶対量が足りないため、金を借りたい人は多いのに、貸せる人が少ないから、金利が上がるのは当然である。その結果、金持ち商人は高利の金貸しでますます富み、それ以外の人々は借金地獄に苦しむ、という著しい不公正な時代だった。武士の収入であるコメの価格は長期停滞（新田開発と人口停滞による）していたから、個々の武士も、藩も幕府も、財政がひっ迫・窮乏化するのは必然である。その是正策として、松平定信が発した「棄捐令」が逆効果であることは明白だろう。強権で武士の借金を帳消しにすれば、二度と金を貸してもらえなくなる。高金利による不公正社会を正常化する抜本策としては、流通貨幣量の増大だけが唯一正しい解なのだ。にもかかわらず、これまで荻原重秀が評価されてこなかったのは、ひとえに、資料としての『折り焚く柴の記』偏重と、新古典派経済学の常識に対する理解不足が原因だろう。

歴史学では、元禄期、宝暦・明和期(田沼時代)、文化文政期(大御所時代)は「弛緩」した時代で、正徳・享保期、寛政期、天保期は改革指向の「緊張」した時代だという常識が存在する。こうした「一張一弛」史観を集大成したのは徳富蘇峰だ。「江戸時代の三大改革」という見方・用語が確立するのは本庄栄治郎編『近世日本の三大改革』(1944年、竜吟社)からだが、それ以前の、徳富蘇峰『近世日本国民史　第28巻』(1928年、民友社)に「天保改革編」というサブタイトルがあり、水野忠邦の政治を「天保の改革」と呼んだことで、「江戸時代の三大改革」というフレームができあがった。

徳富蘇峰が「弛緩」したと見なした時代は、いずれも幕府は支出を増大させた。財源は貨幣改鋳で賄った。すなわち「贅沢と不正の組み合わせ」と見なされる。他方、「緊張」した時代には、幕府は倹約につとめ、貨幣の質を改善ないし維持している。「倹約と正義の組み合わせ」だというわけである。

戦前までの歴史学が、こうした幼稚で素朴な道徳的歴史観を採ったことは仕方がない。しかし、ケインズ経済学やマクロ経済理論が国民レベルで常識になった1960年代以後、歴史学がこうした歴史観を持ち続けることは、とうてい是認できない。間違っているだけでなく、滑稽でさえある。繰り返すが、江戸時代は恒常的に貨幣が不足したデフレ社会だった。15％もの以上に高い金利がそれを物語っている。デフレ期において政府は、支出(公共事業)を増やすべきなのか、それとも緊縮財政をとるべきなのか。デフレ期において政府(中央銀行)は、通貨発行量を増やすべきなのか、減らすべきなのか。今や高校生でも答えを知っている。

にもかかわらず歴史学の世界では、この、当然すぎる常識が依然として通用しない。学界から教科書記述のレベルまで、いまだに徳川吉宗の政治を「享保改革」と呼んでいる。冗談ではない。米が余り始めた時代に新田を開発する、不況にもかかわらず小判の金含有量を上げる(流通貨幣量を減らす)、不況期に緊縮財政をとる。徳川吉宗の政策はいずれも、現代の経済政策の真逆を行っており、当然失敗し、農村は疲弊した(大石慎三郎『元禄時代』1970年　岩波新書)。「御即位で、年号変わり金変わり、江戸の爺(じじい)はなぜに変わらぬ」という狂歌が残されているように、当時から庶民に嫌われていたのだ。

徳川吉宗、松平定信、水野忠邦の政治は、社会政策としてはみるべきものもあるが、経済政策としてはいずれも的はずれ・逆効果で、特に松平と水野の場合は猛反対に直面して短期間で退任に追い込まれている。「江戸の三大改革」

などと持ち上げるのはきわめて不適切であり、江戸時代像を著しくゆがめるものだ。経済学の常識(真理)を歴史学が無視していることで、子どもたちの江戸時代理解を妨げている(わかりにくくしている)。

経済政策としては、貨幣膨脹を計った荻原重秀や田沼意次が正解であり、幕府が大いに支出を増やした元禄期や化政期(大御所時代)に代表的な江戸文化が開花したことも偶然ではないどころか、まさに必然なのだ。

定説は簡単には変わらない。まずは「改革」と呼ぶのをやめ、「徳川綱吉の政治」「徳川吉宗の政治」「田沼意次の政治」「松平定信の政治」などとニュートラルに表現し、先入観を排除することが先決だろう。先に引用した高木久志『通貨の日本史』は、まだ「享保改革」などの用語は残っているが、かなり歴代政権を等距離、ニュートラルに評価している点は注目される。

参考;『生涯』出版後、荻原重秀について書いた小文、出演したマスコミ番組

2007年7月　富士通『Fujitsu飛翔』
「日本人のオリジナリティ探訪　貨幣経済の本質を見抜いた勘定奉行--荻原重秀」

2011年9月16日　NHK「BS歴史館」徳川綱吉「犬公方」の真実

2013年2月23日　FM東京「サントリー・サダディ・ウェイティング・バー」

2013年9月11日　TBS-BS「ライバルたちの光芒」荻原重秀VS新井白石

2014年5/6～13　週刊『エコノミスト』(毎日新聞社)
「大江戸版アベノミクス 見直される元禄の貨幣改鋳 デフレ脱却図った荻原重秀」

2015年11月19日　BS日テレ「片岡愛之助の解明！歴史捜査」徳川綱吉

2016年3月　『波』(新潮社)
「荻原重秀父子の奇怪な死の真相に迫る～諸田玲子『風聞き草墓標』」

2016年7月21日　ＮＨＫラジオ第一放送　「ラジオ深夜便」「歴史に親しむ～勘定奉行・荻原重秀」